

ねりま健育会病院

症 例 概 要 患者：70代 女性

病名：右前頭葉膠芽腫の術後

入院期間：令和4年9月～令和5年3月

経過：令和4年6月 左下肢脱力を自覚し、その後徐々に増悪。A病院外来受診し頭部MRIにて右前頭葉膠芽腫を指摘。

7月open biopsy施行。放射線治療後テモダール療法を実施。

全身状態安定し、テモダール療法を4週間おきに実施することを条件に、9月回復期リハビリテーション目的にて当院入院となった。

内 容

入院時、左上下肢は重度麻痺、感覚障害も認めた。基本動作は寝返りから一部介助を要し、前医にて予後一年の宣告あったが、リハビリ意欲が高かった。

入院後1ヶ月、テモダール療法転院もあったが左下肢の分離は改善を認め、最大で起居動作・立位保持は見守りレベルとなった。しかし、易疲労性・左下肢筋出力低下は増加し、KAFOを使用しての介助歩行は30m程度で介助量が増加した。精神的な疲労を認め、今後の化学療法に対しても消極的な発言が多々聞かれた。

入院2ヶ月、起居動作は最大見守り、起立・移乗も手すりを使用し最大見守りで可能となっていたが、日常的には介助を要していた。疲労はあるものの1日を通しての活動量は向上し、耐久性の向上も図れた。

入院3ヶ月、テモダール療法転院前後で著明な耐久性の低下は認めず、基本動作は立位を伴う動作も含め全般見守りレベルに至った。左下肢の筋出力も向上を認めており、訓練レベルでAFO+四点杖での歩行は中等度介助で可能となった。

入院4ヶ月、テモダール療法帰院直後は嘔気・食欲不振があり動作時の不安定性も認めたが、移乗・トイレ動作終日修正自立に至った。BBSは12点と前回値よりは改善を認めるものの、転院直前と比較するとバランス保持能力の低下を認めた。歩行はAFO+四点杖を使用し、腋窩介助にて最大50m程度は連続歩行が可能であった。

入院5ヶ月、左側の随意性向上し、筋持久力・耐久性は前回退院時と比較し低下していたが、徐々

に改善認めAFO+四点杖にて病棟内歩行見守りとなった。退院後の生活にて、歩きたい・料理をしたいといった希望は継続して聞かれ自主練習にも積極的に取り組んでいた。

入院6ヶ月、テモダール治療の転院前と比較しバランス能力は保たれ、四点杖を使用し歩行自立となり、家族指導を行いADL修正自立、屋内AFO+四点杖を使用し自立自宅退院となった。

予後一年の宣告であり、抗がん剤を実施後は気分不良あるなかでも、常にリハビリに前向きに取り組み、スタッフの体調も気遣う優しい方でした。ご本人の少しでも自身でやれることを増やしたいの思いやご家族は車椅子で短期間でも自宅に帰りたいの思いがある中、チーム一丸となりご本人ご家族に寄り添い、ご本人の趣味も取り入れながら少しでも入院生活の楽しみを模索し、できるだけ早めに自宅に帰れるように関わったことで、ADL修正自立、屋内AFO+四点杖を使用し自立を獲得できた症例であった。